



～お葬儀屋さんのひとりごと～

もし家族に何かあったら・・・

第3章 病気になった家族にしてあげられること

人は病気になったとき、その人が必要としている介護だけでなく、感情面でもサポートすることが大切とされます。介護をしている時に、義務的にいやいや行なったりすると、それがすぐにも相手に知られてしまうので、感情面での接しかたは特に大切となります。

■ サポートのためのチェックリスト

1. 病人のニーズと、家族が出来ることをあげてみましょう。
2. 病人の心理は大変に変わりやすいといわれています。それに合った対応が必要となります。
3. リストアップしてみましょう。
自分の知っている民間療法や食事療法でも、病人が必要としなければ無理にすすめてはいけません。病人がすでに行なっていることから試みてみましょう。
4. 事情通になりなさい。
介護プランを実施するために、現在患っている病気について最低限の医学知識が必要です。その病気はどんな症状が出たり、どの部分が痛くなるかなど知識を予め知っておくことが大切です。

■ 患者の行動能力やニーズを調べてみましょう。

病人が自分のことをどこまで出来るのか、また助けを必要とする事柄をあげてみましょう。また病人だけでなく、それを介護する家族のそれぞれの役割や、時間的にどう分担するかなどを予め把握しておく必要があります。

必要事項のリストは初めは不確かで不完全ですが、徐々に正確なものになっていきます。あなたの家族（病人）の一日の生活を通じて、各段階で必要とされることをチェックしていきます。なおこうした作業は家族全員と相談して決定したいものです。

母と子の絆 [岡山県 主婦 42歳]

母は私が中学1年の秋、突然倒れてしまった。苦しい時代の子育ての苦労が、山積されていたのであろうか。十二指腸潰瘍であった。腹膜炎も煩らい、食べる物もままならず、流動食でさえ受けつけなくなった。水がたまり、まるで妊娠の様な大きなお腹をしていた。往診に来て下さる先生に、母はまるで駄々っ子の様に同じ懇願するのだった。「先生、後生ですから楽にしてくださいな！」

あの絞り出す様な切ない溜息まじりの声が、今だに耳に残っている。血色の水を洗面器一杯抜いて貰うと、少しは楽になるのか？やさしい表情になって眠った。

“安楽死”を求め続け、苦しみ抜いて、中学2年のお正月2日の朝亡くなってしまった。1年3ヶ月、母は闘い続けローソクの灯が静かに消える様に終りを告げてしまった。

私は懸命に母の看病をした。母の「ありがとう」の言葉に支えられ、絶対によくなると思い祈りながらの毎日であった。その母が、私に残してくれた言葉がある。末娘を思う万感の思いが身にしみる言葉である。「早よう別れる事になりそうで、ご免よ。死んだら、草葉の陰で見守っているからね」。母と死に別れて28年、母と過ごした年月の倍生きてきた私。辛い時、嬉しい時、その言葉を思い出す。子供にとって、母の存在は絶大で計り知れないものである。

最近体調の思わしくない私は、病院で検査して貰った。「心臓が弱っている」と言われ複雑な気持ちになる。9才と14才の息子達の母である私は、母親としてしなければならない事が山の様にある。死に急ぐ事は出来ない。例え我侭だと言われても、お迎えはもう少し先に延ばして貰いたいものだと思う。

